

挨拶

尾 池 和 夫（京都大学総長）

第14回の大学教育研究フォーラムの開催ということで、たくさんの方に集まっていただきました。学年末のお忙しい中を本当にありがとうございます。主催者を代表してお礼とごあいさつを申し上げたいと思います。

今、第14回という話でしたが、全国の大学教育の関係者の方が京都の地に、年度末の3月に集まるのは二つ大きな会があるそうで、3月初旬の大学コンソーシアム京都の主催するフォーラム、それから14回を迎えたこのフォーラムということで、センターの方たちに何うと、大学教育に関しては西高東低といわれているのだそうですが、本当にそうなのかどうか。明日のご講演では、現在、中教審で進められている学士課程教育に関する審議の中核でご活躍の鈴木敏之企画官が、文部科学省から来られてお話をしてくださるそうです。いろいろな計画がたくさん盛り込まれています。私のこのごあいさつの後で、相互研修型のFD組織化という京都大学の特色GPに関する田中センター長の報告があって、それを受けてシンポジウムを行うとプログラムにあります。この相互研修型のFD組織化という企画は、大学のそれぞれの現場での日常的、自主的な教育改善活動を生かすFDの組織化の在り方を模索するものです。

私は、第1回を割合よく覚えています、それは私が地震学を専門にするものですから、第1回が行われた平成7年3月というのは阪神大震災の直後で、教育どころではない、私は地震で忙しいのだという話をした記憶が残っているので、この歴史がよく分かります。振り返ってみると、日本の大学教育をどうするかというのが第1回のテーマに掲げられていました。最近は何回というだけで主題がありませんが、主題をずっとたどっていくと、第6回は「FDをどう組織するか 相互研修の共同体へ向けて」というような題が非常にいかめしく付いています。その次の第7回は、「大学教員の教育能力をどう開発するか」、第8回「大学教育評価をどうするか 評価からFDへ」というように、FDという言葉が明記されるようにだんだんってきます。

その歴史の上で、今日のこの第14回があるのだろーと思います。第7回か8回あたりで、京都大学の工学研究科長をやっていた荒木光彦さんが、非常に忙しくFD、FDとあちこちで叫んでいたのをよく覚えています。GPの当初計画で、センターは、FD組織化を主に工学部において試みるつもりで計画を書いておられました。実際に4年間の主な作業は、センターと工学部との連携で進められていました。ところが、審査委員会の方からこのプロジェクトに対して、FD組織化を工学部の枠を越えて、全学に拡大するよーというメッセージを頂きました。それでセンターでは、一方で工学部との連携のプロジェクトを実現すべく努力されながら、他方でこの組織化を全学に拡大していく可能性を追求なさったわけです。

センターでは、まず京都大学の学部を持つ10の研究科でヒアリングを実施して、大学の研究科で予想以上に日常的な教育改善の努力が行われることを確認されました。このデータで、今日もお話があると思いますが、センターは、各研究科の日常的な教育改善を支援する全学FD研究検討委員会を設置するという提案をしてくださいました。それが発足して、この委員会は1年間、かなり実質的な活動をなさったわけです。こういう点から見ても、FD組織化を全学に拡大するよーという、GP審査委員会の示唆はありがたいものでした。私どもも、そのコメントに対して十分お応えしていると考えます。

さらに、このセンターは大学院設置基準ならびに大学設置基準でのFD義務化の動向を受けて、相互研修型FD実施のための大学間相互支援組織として、関西地区FD連絡協議会の設置を目指してきました。規約などの作成や基幹校の組織、準備会の開催、ワークショップ開催などの実績を積み上げて、いよいよこの4月に総会を実施し、関西地区FD連絡協議会を正式に立ち上げることになっています。このような活動に対して、文部科学省もご支援くださりまして、「大学教員の教育研修のためのモデル拠点形成」という概算要求を出しましたが、ほぼ全額認めてくださって、4月からプロジェクトが実施されることになりました。

このように相互研修型FDの組織化の試みは、京都大学の中での試みというよりは、FDの本来の在り方を積極的に示していると考えています。FDが法制的に義務化されると、教員集団の日常的な教育改善としっかり結合する相

互研修型 FD の組織化が求められると考えられます。京都大学は今年、機関別認証評価を受けており、そこでも 9 番目の項目にしっかりと、FD をどのようにしているかということが検証されます。明日発表なのでもう言っているでしょうが、私も東京工業大学の認証評価の座長をしておりまして、こちらそういう目で一生懸命、分厚い書類を拝見しました。それが良い大学を育てていくためには厚かましい言い方ですが、大学の改善と説明のために大変いい効果を生んでいると実感しました。現実的には、達成の難しさなど、これから困難を乗り越えていかなければいけません。今日は、絹川先生、天野先生、関内先生、山内先生と、こういった議論に最もふさわしい方々にお集まりいただきまして、年度末の本当にお忙しい中、ご議論を頂きます。

われわれの大学で行われている FD の拠点形成に至るまでの実績を踏まえて、それをまた点検していただくということで、京都大学の総長として、本当に深く感謝を申し上げたいと思います。このシンポジウムをはじめとして、このフォーラムのすべての企画が、日本の大学教育の改善に十分な機能を果たすことを期待しまして、私のごあいさつとさせていただきます。たくさんの方にご参加いただきまして、本当にありがとうございます。

（大塚） 尾池先生、どうもありがとうございました。尾池総長は、実は今日もこれから経営協議会がありまして、そんなご多忙のなか、駆けつけて下さっております。地震学がご専門ですが、幅広いトピックを提供下さいますので、先生のお話はいつも楽しみです。京都大学でも、いろいろ楽しい試みをして下さっておりまして、この会場を出たところに、京大グッズの売り場がありますが、そこに総長プロデュースの「総長カレー」というものがありますし、向かいのカフェテリアでは、総長プロデュースのビールなどもありますので、これは尾池先生の総長の任期がこの秋で一応終了することもありまして、今がチャンスと言うこともありますので、どうぞお試しいただければと思います。

たまたま昨日の晩、NHK の「爆笑学問」という番組で、爆笑問題が京大にやってきて、「独創力」というテーマで、京大の先生方、学生たちと議論をしていました。京大ならではのテーマではないかと思います。実際に、今日のテーマになっている「相互研修型 FD」も、ある意味で京大発の独創的な部分があるのではないかと思います。昨日の爆笑問題の議論の中でもありましたが、独創というのは思い付いただけでは駄目で、それをいかに共有していくかという部分で、初めて独創的といえるわけです。「相互研修型 FD」につきましても、その「共有」ということの一つのきっかけとして、今日のシンポジウムが展開されていければと思っています。

具体的には、「相互研修型 FD の組織化による教育改善」という、平成16年度に採択されました特色 GP が、私どものセンターを中心に 4 年間行われてきました。その報告は、センターで刊行しております「京都大学高等教育叢書 26」にまとめられております。記録として、いろいろ資料を入れ込みましたら、かなり分厚くなってしまいましたが、これは高等教育研究開発推進センターのホームページに入っていただければ、すべて PDF 版でご覧いただけるようになっていますので、どうぞご参照いただければと思います。

今日はまず基調報告として、私どものセンター長である田中毎実より、その概要をご報告しまして、後ほど、それに基づきまして、ゲストの先生方からコメントを頂くという形で進めたいと思います。それでは、まず、高等教育研究開発推進センター田中毎実センター長より基調報告をいたします。